『嵯峨日記』と西行の「たはぶれ歌」の関連性

河野良子

本稿では、この日記の中にある発句の連作は、西行の「たはぶれ歌」から発想したものと考えられるのか、また、この二つの作品には関連性があるのかを、『嵯峨日記』と「たはぶれ歌」の根底にある二人の姿勢を探りながら、追求していきたい。

一　はじめに

芭蕉は作品を創る際に、まず向かい合った対象から呼び覚まされる古人の世界を思い浮かべ、一度その世界に入った後に、初めて自分の世界を生み出していくという発想方法を採っていた。時間を隔てた古人との交流によって、詩心を発生させていたのである。そうした古人達の中で、西行は芭蕉にとって尊敬の念と憧憬の念を抱いた先達であった。芭蕉は西行の草庵生活に憧れ、庵住生活を通して西行の至った世界を追求し、自己の芸術を究めて行ったと言っても過言ではないだろう。

『おくのほそ道』の旅を終えて、幻住庵や木曽塚の草庵生活を送った後の元禄四年四月十八日から五月四日にかけて、芭蕉は洛西嵯峨の落柿舎に入った。それを契機として成ったのが『嵯峨日記』である。嵯峨はかつて敬慕する西行が出家後草庵を結び、その後も何度も滞在していた場所であり、芭蕉にとっては西行を意識せざるをえないところなのである。故に、この風雅の地と西行に敬意を払って、詩情性と俳諧的さびを兼ね備えた、文学作品としての日記を書こうとする意図が、初めからあったのではないかと考えられるのである。

二　「たはぶれ歌」とは

『聞書集』におさめられている西行の「たはぶれ歌」は、子供達の遊ぶ姿に対して温かいまなざしを注ぎつつ、老年にさしかかった作者が、その感慨を軽い感じで詠み進んでいる連作の和歌として捉えられてきた。

しかし、子供の時の遊びを回想して、昔なつかしい世界に誘われる前半の歌とは違うニュアンスが、最後の三首には感じられる。その三首とは、

いしなごのたまのおちくるほどなさにすぐる月日はかはりやはする　（一七五）

いまゆらもさでにかかれるいささめのいさ又しらずこひざめのよや　（一七六）

ぬなははふいけにしづめるたていしのたてたることもなきみぎはかな　（一七七）[1]

である。何か過ぎ去ったものに対する切なさや、人生に対する哀感のようなものが伝わってくる。なぜこのような歌が「たはぶれ歌」の中に詠まれたのだろうか。そこで、「嵯峨に住みけるに、たはぶれ歌とて人々よみけるを」という詞書に見える「人々」とはどういう人達なのか、この歌はどんな状況でいつ頃詠まれたのか、などを解明しながら西行の「たはぶれ歌」を考察していきたい。

（1）詠歌状況

「たはぶれ歌」はその詠作時期については、西行が二度目の奥州への旅から帰った後、嵯峨野に住んだ時に詠んだのではないかと言われてきた。[2] しかし、宇津木言行氏は、

「たはぶれ歌」を生活実感に即した詠歌とみなす前提に立つ論説は、西行の伝記的事実の考証までも大きく誤らせてきたわけである。[3]

とし、「たはぶれ歌」の詠作時期を、高野山を離れて伊勢に移住する治承四年（一一八〇）以前の、京都在住の折ではないかと推定された。[4]

「たはぶれ歌」は勅撰集的な歌の標準からは、はみ出した歌である。西行は『新古今和歌集』では最高歌人と扱われながら、治承四年以前ではまだ一般には認知されていなかった歌人である。西行歌十八首が入集した『千載和歌集』の撰集が宣下されたのが一一八三年、西行六十六才の時で、完成が一一八七年、西行七〇才。奥州の旅に行って帰ってきた後である。「たはぶれ歌」の特異な面と新しい連作を創ろうとする意欲、そして最後の歌に見られる自嘲的な面を考えると、宇津木氏の言うように詠作時期は『千載和歌集』宣下前の伊勢移住以前ではないかと推察されるのだが…。

詠作時期についてはまだ不確定であるが、同座した人々は気心の知れた嵯峨在住の隠者達であったろうと、宇津木氏は推察しておられる。そして、その中に嵯峨の草庵を拠点としていた寂蓮も参加していたのではないかと予想しておられ、その根拠の一つとして、後に寂蓮が「たはぶれ歌」の最後に詠まれている「たていし」を題材とした歌を詠んでいるからだと言っておられる。[5]『寂蓮法師集』には「古池菖蒲」という題で廃園の池の様子を詠んだ三首が入っている。その中の二首に、

菖蒲草けふひく跡にみゆるかな立ておく石も池のこころも　（三六四）

あやめ草けふひくあとぞ池水にたておく石も有りと見えけり　（三六五）[6]

（傍線部筆者、以下全て傍線は私に付す）

と「立て石」が確かに詠まれている。これについて小林若菜氏は、

立て石は当時において特殊な歌材であった。西行が生きた時代の前後の歌集として（中略）立て石が詠まれた歌は二首しか見

出されなかった。さらに池の立て石となると、西行・寂蓮以外には見出すことが出来ない。[7]

と言っておられる。よって、寂蓮が「たはぶれ歌」の歌会に参加していた可能性は高いと思われる。

では、気心の知れた人々の気楽な雰囲気の中で歌われた「たはぶれ歌」の主題、もしくは描きたかったことは何であったのだろうか。次にいくつかの歌を見ながら考えていきたい。

（2）歌の考察

①うなゐこがすさみにならすむぎぶえのこゑにおどろく夏のひるぶし　（一六五）

この歌は子供が吹き鳴らす麦笛の音に、草庵で昼寝をしていて、はっと目を覚ました景を詠んだものである。子供の遊びの姿を描きながら、昼寝から覚めてまだ夢心地でいる自分自身の姿に焦点があてられている。

宇津木言行氏は、『白氏文集』巻十・感傷二に「晝寢」と題して夏の昼寝を詠じた詩があり、「たはぶれ歌」の発想源の一つではないかと指摘しておられる。[8]それは、『聞書集』所収の法華経二十八品のうち二首（一九・二九）が中国故事を取り入れているので、西行が一通りの漢詩文の素養を身につけていたのではないかという推察からであるようだ。宇津木氏は、

最初の歌で、夏の日に主人公が昼寝する草庵という場面を喚起力強く設定して、連作を詠み起こしていることがことのほか重要である。隠者の境遇をさながら浮き彫りにするところに照準は定められた。

と論じておられる。[9]このように昼の物憂げな姿を表す事によって、隠遁者を連想させているのが注目される。

②むかしせしかくれあそびになりなばやかたすみもとによりふせりつつ　（一六八）

草庵の外で子供達がかくれんぼ遊びをしているのを、草庵の中の隠者が見ている姿が想定される。「自分の現在の姿が、そのまま自分が過去にした隠れ遊びの姿に移行する願望を歌ったものである」という稲田利徳氏の解釈[10]をとりたい。「なりなばや」と結句「つゝ」によって、草庵の片隅に寄りかかって横になっている隠者の姿が浮かびあがり、冒頭歌の草庵で昼寝している句とつながっていることがわかる。幼い時を懐かしんで、その当時に戻りたいという願望を抱きながら、何か安らかな感じが漂い、遊んでいる子供達に対するやさしいまなざしも感じられる。田仲洋己氏は

子どもと老人との間に厳然と横たわる人生の時間と経験の重みを歌の詠み手は片時も忘れてはいないのである。[11]

と論じておられるが、確かにこの歌からは、自分の過ごしてきた人生に対する感慨が感じられる。

では、子供の遊ぶ姿を見ながら、老人となっている自分の姿に感傷的な感慨を覚えているその主人公を、隠者の姿に置きかえた意味

は何であろうか。隠者というのは世間から「隠れている」状態であるが、かくれんぼという遊びは隠れた後、見つけられることを前提としている。従ってこの歌に提示された隠者は、「人に見つけられる期待を心に秘めた像であり、そこに西行の遁世の実相がはしなくも露呈している」[12]と、宇津木言行氏は言っておられる。故に、心通う友や隠者歌人が集まった歌会において、孤独を経験して真に友を求め合う気持ちを持っている西行が、自らの隠者の姿勢を演じてみせたのが、この歌だったのではないかと考えられるのである。

③たけむまをつゑにもけふはたのむかなわらはあそびをおもひいでつつ　（一六七）

この歌は「たはぶれ歌」の最初の昼寝の景を詠んだ歌と同様、『白氏文集』巻十・感傷二に載っている「觀二兒戲二」を題材としているのではないかと、宇津木言行氏は指摘しておられる。[13]子供達の竹馬の戯れを見ながら幼い頃を思い出すと同時に、現在の自分の姿をありのままに凝視している。昔と今を対照的に捉えて、現在の自分の姿というものをあざやかに描こうとしているのではないだろうか。田仲洋己氏は、

子どもの遊具である竹馬と老人の必需品である杖とが、ともに竹という同一の素材から出来ていることに着目して、一人の人間の生涯の両端に位置する幼年時代と老年の時間を重ね合わせ、さりげない詠みぶりの中に子どもと老人との同質性と異質性をさながら閃光の如くに開示してみせる一首である。[14]

と論じておられるが、まさに子供時代を経て、老人となった自らの生を捉えているのが感じられる。

④ぬなははふいけにしづめるたていしのたてたることもなきみぎはかな　（一七七）

「たはぶれ歌」最後の歌で、「じゅん菜が這う荒れた池を眺めると、以前はちゃんと立っていただろうに、今は池の底に沈んでいる石が見える。志を立てたのにもかかわらず、これといって取り立てた功績もなく老人になってしまった我が身であることよ。」という意味である。[15]

前述したように、「たて石」は特殊な歌材であって、沈淪の身を嘆く述懐の意を表す為に用いられたようである。西行歌の「たてたる」の「たて」には、「石を立てた」と「誓いをたてた」の意味が掛けられており、「みぎは」には、池の「水際」と「身の際」が掛けられている。故にこの一首は、倒れてしまって人から顧みられない立て石のように、人に知られずに我が身は無用に帰してしまうのだろうかと、自嘲しているようにみえる。しかしだからといって重く沈んだ想いというのではないであろう。というのは、最初に子供の遊びの世界を提示して、まるで昼寝をしてぼんやり過ごしたように老人になってしまった自分の人生を、澄んだ透明な目で見つめているのが感じられるからである。宇津木言行氏は、

連作を結ぶ一首は、無用者の意識を自覚しつつ、隠者と言う存在の様態を、捨て置かれた廃園の池のたて石に比喩的に投影して見せた歌と受け取ってよいだろう。その意味でこの歌は、草庵に身を横たえて昼寝する隠者の姿態を写す第一首に円環的に

回帰する。[16]

と指摘しておられるが、西行は、隠者の像に自分の様態の一部を重ねてみせたのであろう。

以上見てきたように「たはぶれ歌」で西行は、子供の頃の遊びなどを題材に取り入れつつ、自分を草庵に身を横たえる隠者として造型した。そしてその老人となっている隠者の姿を感慨をもって見つめ、それをそのまま自分の姿として、孤独を知り、風雅を解している気心の知れた友人達の前に提示したのである。ここからは、独り閑居しながらも、「数奇」を通しての人々との交わりを求めている西行の姿が見て取れるのである。

三　『嵯峨日記』の考察

元禄四年に書かれたこの日記には、芭蕉の内面を吐露するような西行と杜国への思いが綴られ、門人達との飾らない交流とそれに心から浸っている姿も記されている。これらの事が記されたのは、芭蕉のどんな姿勢や心情から来ているのだろうか。西行への想いが吐露されている記述などにふれながら探っていきたい。

（1）四月二十日

まず最初に、凡兆の妻である羽紅尼と去来が訪れてくれた喜びが、簡潔な文章から伝わってくる。そして次に置かれた

つかみあふ子共の長（たけ）や麦畠

（「嵯峨日記」『松尾芭蕉集②』紀行・日記編　新編日本古典文学全集　小学館一九九七年　以下同様）

の句からは、子どもたちの元気な様子と青々とした麦畠の情景が浮かび上がってくる。それと同時に、「たはぶれ歌」の世界にも通じているのが感じられる。この句は去来の途中吟として語られているが、芭蕉がこの日記に載せたのは、明確な意図があっての事と推察される。麦畑では子供たちがふざけながら喧嘩をしていて、麦の穂の上や間から子供の頭や手足が見えているだろう。甲高い声やわめくような声も明るい日差しの中から聞えているにちがいない。青々とした麦畑で子供たちの戯れている様子は、のどかではつらつとした感じを受ける。

「たはぶれ歌」が子供たちの遊びを見て、自分の子供時代の遊びをなつかしさを持って回想しているのとは趣が違っているが、芭蕉が嵯峨の子供たちの姿をまず映し出したことに、意味があるように考えられる。それは後の四月二十三日で、昔の子供時代をなつかしんでいる句と現在の自分とを対比して感慨にふけっている句を並べている連作の発句を生かすためのように思われるのである。

この後には、芭蕉と凡兆、羽紅尼、去来との一夜の楽しげな集いの様が描かれ、芭蕉の本当にくつろいだ心情がその記述からうかがえる。たとえば、「羽紅夫婦」という書き方にしても、一般概念からしたら「凡兆夫婦」と書くべきところを、故意にくつろいだ感じを出すために反対にしている。また、

蚊屋一はりに上下五人挙（こぞ）りて臥たれバ、夜もいねがたうて夜半過よりをの〳〵起き出て、昼の菓子・盃など取出して暁ちかきまではなし明ス。

の記述からは、風雅を解した人々との心通う様子と、終夜の歓談の様子が見て取れる。「去来兄の室より菓子調菜の物など送らる」という文章から推察するに、この四月二十日の会は、『猿蓑』が大体完成のめどがついて、そのお祝いと慰労をかねて宴を催したのだろうと、富山奏氏は推察しておられる[17]。確かに文学的充実と心の充実があったからこそ、このような喜びあふれた様子が表せたのであろう。

（2）四月二十二日

この日は初めての独りだけの日である。敬慕する西行に想いをはせ、

とふ人もおもひたえたる山ざとのさびしさなくばすみうからまし[18]

の和歌を思い出して、

「さびしさなくばうからまし」と西上人のよミ侍るは、さびしさをあるじなるべし。

と記している。西行の山里での生活は、「さびしさ」をあるじとして、それに身を寄せ、対話していたのであろうと推測している。自分も孤独を体験して、西行の「さびしさをあるじとする」心を理解し、心が通い合ったからこそ、「独住（ひとりすむ）ほどおもしろきはなし」の心境になったのであろう。この場合、「さびしさ」は芭蕉の理想とする境地であり、古来からの隠遁者のイメージでもあったと考えられる。尾形仂氏は、

孤独に徹することによって、その昔、孤独の中に、もしくは閑の中に住した人びととの心のつながりを回復する。そこにおもしろさを見い出している…（中略）他と隔絶するだけでは、何の稔りも生まれてこない。孤独を介して他とつながる。そこから真の意味の連衆心にもとづいた俳諧が生まれる[19]。

と言っておられるが、正にそのように芭蕉は考えていたと思われる。

この後、さらに芭蕉は木下長嘯子（ながうちちょうしょうし）が『挙白集』に記している言葉を思い出して、「客ハ半日の閑を得れバ、あるじハ半日の閑をうしなふ」と言っているが、激しい運命に揺さぶられた長嘯子が実感していたように、「思ふどちの語らひはいかでむなしからん」と思っているのは明らかである。本当に心の通い合った者同士の語らいは、充実したものであり、理想とする「閑居」と矛盾するものではないと言っているのだと考えられる。まさに尾形氏が論じているように、

閑というものが、孤絶―つまり他と絶した孤独ではなくて、孤独者同士の共鳴である[20]。

ということであろう。故に、西行が呼びかけた「よぶこ鳥」が、芭蕉の呼びかけた「かんこどり」に相当し、

うき我をさびしがらせよかんこどり（閑古鳥）

の句は、孤独を自覚する者同士が連帯を求め合う呼びかけともなるのである。

（3）五月二日～四日

二日に曽良が訪れて、江戸の知人・門人の話などをして、一緒に大井川で舟遊びをした事が記されている。この日記に記されている限り、芭蕉が出かけたのは四月十九日と、この日の二日だけである。丈草などの門人が訪ねて来てはいるが、いつになくじっくりと自己と対峙する時間を持てたのが、この落柿舎滞在ではなかったのだろうか。だからこそ落柿舎を出る時に名残を惜しんで、部屋を一間ずつ見て廻り、その感慨を「五月雨や色紙へぎたる壁の跡」と、句に詠んだのであろう。この最後の句には、この日記全体を締め括るあわれな余情と感慨が感じられる。

以上見てきたように『嵯峨日記』は、淡い色合いに包まれた一幅の絵のような静かさをたたえながら、心通い合う門人達との終夜の歓談や交流と、西行を代表とする古人との風雅を介しての交わりが描かれていた。また一方では、「独住ほどおもしろきはなし」と、西行の草庵独居に対する共鳴と「閑居」に対する気持ちも表されていた。その二つの心と姿は、西行の「たはぶれ歌」にも見て取れたものではないだろうか。

四　『嵯峨日記』の中の発句の連作と「たはぶれ歌」の関係

西行の「たはぶれ歌」は、自分の生の時間を描き、自分を隠者として造型して見せたものだった。そしてその隠者というものが俗を離れないもので、風雅を知る人々との交わりは求めているのだということを、親しい歌人たちとの場で連作歌として示したものであった。

西行が『白氏文集』の「晝寢」から「たはぶれ歌」を発想したのではないかというのは前述した。『白氏文集』は芭蕉が携え持ってきた書物であり、深く読み込んでいる本だと思われる。芭蕉は、その書物から西行が「たはぶれ歌」を発想した可能性があるということを感じていたのではないだろうか。それ故、『嵯峨日記』の中に、「たはぶれ歌」のような発句の連作を試してみようとする意図があったのではないかと考えられるのである。そこで、四月二十三日の発句の連作を詳細に見ながら、「たはぶれ歌」との関連性を探っていきたい。

（1）発句の考察

①手をうてバ木魂（こだま）に明（あく）る夏の月

「手を打つと、その響きもおさまらないうちに夜が明けるかと思うほどに、夏の夜の短いことよ。清らかな夏の月をながめている時間が夜明けと共に失われると思うと、あまりに惜しくて」と、夏の夜の短い事を嘆いている句である。富山奏校注の『嵯峨日記[21]』の頭注によると、二十三夜の月待ちの折の吟である。月待ちとは、人々が寄り合い、飲食を共にしながら月の出を待ち、拝する行事で、その折に俳席なども催したということである。

「たはぶれ歌」を親しい隠者歌人達の集まった歌会の場で詠まれたのではないかと推察したように、この発句の連作も芭蕉、去来、千那、凡兆の四人の俳席の中で詠まれたのではないかと考えられる。風情のある景色を前にした心の通い合った門人たちとの俳席は、くつろいで楽しい雰囲気であっただろう。だからこそ短い夏の夜が一層惜しく感じられたのだと思われる。

②竹の子や稚(をさなき)時の絵のすさみ

「土の中からムックリと頭をもたげている竹の子の姿を見ると、子供の時に竹の子の絵を描いて遊んだ事が思い出されて、懐かしい」という意である。竹の「子」のように自分にもあどけない子供時代があったのだと、しみじみと回想しているのが感じられる。嵯峨は竹やぶが多い所で、ちょうど落柿舎滞在の時期は竹の子が出ている時であったのだろう。西行が嵯峨の草庵で、子供達の遊び戯れているのを見ながら子供時代の事をなつかしんで回想していたように、幼い時に竹の子の絵を描いたことを思い出している。子供の時から、老年にさしかかっている現在の自分になる迄の、過ぎてきた人生の時間を想い起こしてもいるのであろう。この句は、「たはぶれ歌」の中の、「むかしかないりこかけとかせしことよあこめのそでにたまだすきして（一六六）」に通じる幼い時へのなつかしさと人生に対する感慨を感じさせる。

③一日〳〵麦あからみて啼雲雀

「一日ごとに麦は色づいてあからんでいっている。そのように刻々と夏の気が深まる野辺では、春の遠ざかるのを悲しむかのように、空高くヒバリが啼いている」という意である。ヒバリという鳥には、一心に鳴きつくし、鳴きあかすというふうに形容される例がみられる。よって、何か切羽詰った余裕のなさを感じさせる鳥である。この句では、ヒバリが啼いていることにより、季節の推移に対する感慨と人生に対する感慨との両方が感じられる。四月二十日に記された句「つかみあふ子共の長や麦畠」が、「青い空と青い麦と元気な子供たち」というはつらつとして明るい情景と若さを思い起こさせるのに対し、この句は色づいた麦からいろいろな経験をして成熟した人生の存在を感じさせる。だがそこに何かしら憂いが感じられ、人生の秋を想わせる淋しさが漂っている。感慨をもたらしているのが鳴きつくしているヒバリであることによって、余計に「あはれ」な気持ちがもたらされいるのではないだろうか。

④能なしの寝(ねむ)たし我をぎゃう〳〵し

連作最後の句。「才能がなくて何の役にも立たない私は、ただ眠たいのである。そんな私に対して起きよといわんばかりにギャアギャアと鳴きたててじゃまをしないでくれよ、行々子」と、行々子に呼びかけている句である。

行々子というのはヨシキリのことで、ギョ、ギョ、シーと鳴くところからその名がつけられているようだが、いかにも眠っている人をうるさい声で起こしているようで、滑稽さが感じられる。

芭蕉が自己を「能なし」とするのは、『笈の小文』の「無能無芸にして」や『幻住庵記』の「無能無才にして」のような俳文に見受けられる。この「無能無才にして」の表現は、「この道しかなく、この道一すじに行くこと」を決心した言葉である。しかしこの句での「能なし」は、「俳諧以外何の能力もない自分」というよりは、自分を道化にして、一人ぶつぶつと行々子に対して文句を言っているように感じられる。だからといって怒っているのではなく、余裕のある境地であることが伝わってくる。草庵で寝て過ごしている姿は、世俗を離れた境涯を示しているのであり、詩人の理想とする姿なのであろう。このまだ眠くてぼんやり臥せっている様子は、「たはぶれ歌」の最初の「夏の昼臥し」の歌につながっていると考えら

れる。

「たはぶれ歌」最後の歌は、池に沈んでいるたて石に自らの境遇を照らし合わせて、世俗的には無用者となっている身を自嘲していた。芭蕉は、「能なし」「寝たし」「ぎゃうぎゃうし」と句をポツポツと切って、自分をおどけた無用者にしたててはいるが、現在の自分の様態と今迄過ごしてきた人生の時間を感慨を持って眺めている点において、抱いている感慨は同じであるように感じられる。西行歌は複雑な陰影を帯びた隠者を浮かび上がらせているのに対し、芭蕉のこの句は、何か滑稽で、人に対して心を開いている人物の存在を感じさせる。これは、前の「うき我をさびしがらせよかんこどり」で、閑古鳥の鳴き声を聞いて淋しさに浸っていたいと、閑古鳥に呼びかけた気持ちと同じ形であろうし、西行が「よぶこ鳥」に呼びかけた気持ちとも同じであろう。芭蕉も西行も隠遁し閑居する事を望みながらも、風雅を解する人々との交わりは求めていたのである。座を共にした人々に対して、今の自分の姿をありのままに提示して、人々とつながろうとしている態度は共通であるように見受けられる。

五　おわりに

以上見てきたように、「たはぶれ歌」で設定された草庵の隠者のように、『嵯峨日記』四月二十三日の発句の連作において、芭蕉は幼年時代、青年時代を経て、老年にさしかかった己の人生を振り返って、過ぎ去った時間と現在の自分を見つめていた。そして、西行への想い、門人などさまざまな人への想いも凝縮されていた。芭蕉には西行との間に、時間的経過を超えてより大きな深い結びつきがあり、その伝承の場においては、新しい作品を創造するという行為を掻き立てられたことが考えられる。芭蕉は自らの「風雅」の心を確かめる孤独の時間と、共同体的世界である「座」という二つの時間と空間を持っていて、この間を行き来する事によって自らの魂を顧み、鍛え、作品を生み出していったのである。西行の人々との結びつきの姿勢は、「座の芸術」を目指し、連衆との一期一会を大切にして作品を創っていこうとする芭蕉には、お手本だったと考えられる。二人とも苦しみや悩みを持ちながらも自分の世界を確立したうえで、皆で集まる「うたげの世界」を持っていたのである。明らかにこの発句の連作は、「たはぶれ歌」に影響されて詠まれたものであり、『嵯峨日記』自体も、「たはぶれ歌」と西行という存在とその生き方を意識して書かれた日記だと考えられるのである。

付記

『嵯峨日記』は、芭蕉自筆本は伝存未詳。諸本としては、芭蕉真蹟を忠実に写したと見られる故野村胡堂本（以下野村本と呼ぶ）と芭蕉翁記念館本（曽我忠兵衛旧蔵　曽我本）の二種がある。本稿は野村本を底本とした新編日本古典文学全集七一を本文として採用した。四月二十三日の発句の連作の解釈は、上野洋三編『笈の小文・更科紀行・嵯峨日記』（和泉書院　二〇〇八年）を参考にした。

注

(1)　本文引用『新編日本国歌大観』第三巻　角川書店　一九八五年以下同書

(2)　窪田章一郎『西行の研究』東京堂出版　一九六一年

(3)　宇津木言行「隠者の姿勢―西行「たはぶれ歌」論」

（『文学』六-四　二〇〇五年七月）

(4) 宇津木言行「西行『聞書集』の成立」（『和歌文学研究』八七号　二〇〇三年十二月）
(5) 注(3)　前掲論文
(6) 本文引用『新編日本国歌大観』第四巻　角川書店　一九八六年
(7) 小林若菜「西行研究―「たはぶれ歌」の世界」（東京女子大学日本文学九七号二〇〇二年八月）
(8) 岡村繁『白氏文集』二下　新釈漢文大系　明治書院　二〇〇七年
(9) 注(3)前掲論文
(10) 稲田利徳「西行の「たはぶれ歌」をめぐって」（『西行の和歌の世界』笠間書院　二〇〇四年）
(11) 田仲洋己「子どもの詠歌追考―子どもが詠んだ歌と子どもを詠んだ歌―」（『日本文学』五一-七　二〇〇二年七月）
(12) 注(3)前掲論文
(13) 同前論文
(14) 注(11)前掲論文
(15) 久保田淳『山家集』岩波書店　一九八三年と注(7)前掲論文を参考
(16) 注(3)前掲論文
(17) 富山奏『異端の俳諧師　芭蕉の文藝境』所収　和泉書院　一九九一年
(18) 『山家集』本文は「陽明文庫本」久保田淳編『西行全集』日本古典文学会　一九八二年
(19) 尾形仂『芭蕉の世界』（「六、『猿蓑』の達成」より）講談社　二〇〇一年
(20) 同前書
(21) 富山奏校注「嵯峨日記」『芭蕉文集』新潮社　一九七八年

なお本稿は、平成二十年度の卒業論文によるものです。卒論指導は児玉竜一先生に、テーマについては東聖子先生にご指導を賜りました。深謝申し上げます。

受贈雑誌（七）

近松研究所紀要　園田学園女子大学近松研究所
千葉大学日本文化論叢　千葉大学文学部日本文化学会
中央大学国文　中央大学国文学会
鶴見大学紀要　鶴見大学
鶴見日本文学　鶴見大学大学院日本文学専攻
帝京日本文化論集　帝京大学国語国文学会
帝京大学文学部紀要　帝京大学文学部日本文化学科
帝塚山学院日本文学研究　帝塚山学院大学日本文学会
東海学園言語・文学・文化　東海学園大学日本文化学会
東京女子大学日本文学　東京女子大学日本文学研究室
東京大学国文学論集　東京大学文学部国文学研究室
同志社国文学　同志社大学国文学会
同志社女子大学日本語日本文学　同志社女子大学日本語日本文学会
同朋文化　同朋大学日本文学会
東北文学の世界　盛岡大学文学部日本文学科
徳島大学国語国文学　徳島大学国語国文学会
常葉国文　常葉学園短期大学国文学会
都大論究　東京都立大学国語国文学会
名古屋大学国語国文学　名古屋大学国語国文学会
名古屋平安文学研究会会報　名古屋平安文学研究会